

# 校長室の窓

第 3 号

2013, 6, 20  
長野県蓼科高等学校 長  
金原 正

## ～「ポプラよ永遠とわに」～

本校の玄関から入ってすぐの階段を上ると、踊り場正面に右のレリーフ作品が飾られています。何気なく通り過ぎてしまう人も多いかと思いますが、この作品には本校の歴史と先輩たちの願いが込められています。作品の下に添えられた説明文には次のように記されています。



蓼科高等学校のシンボルである2本のポプラの木のうち、門柱に向かい左側の1本は新芽をふかなくなり枯れ、危険であること等を理由に平成8年7月15日に伐採された。そして残された右側のポプラの木も平成11年6月28日の風雨により根元より折れ倒れてしまった。このような予期せぬ出来事でシンボルを失ってしまったことは来年で創立100周年を迎えようとしている本校にとって非常に残念なことであった。

ポプラの木は創立記念に植えられたものらしく、後1年で100歳を迎えようとしていた。自然の偉大さに、人はただただ敬服の念を抱かざるを得ない。約100年の間蓼科高等学校で青春時代を過ごした幾多の生徒を見守ってきたポプラの木の終焉は私達に様々な感慨をもたらした。私達はポプラの木を何らかの形にして残したいと考え、平成11年度・第30回ポプラ祭特別企画として、レリーフ作品を制作した。天まで届きそうに真っ直ぐに伸びる木、風になびくポプラの葉はとても清々しく感じられる。制作にあたっては、そんなイメージを大切に、そして「ポプラよ永遠とわに」「蓼科高校よ永遠に」の想いをこめた。作品は基底材以外は倒したポプラの木のみに使用した。

倒れたポプラの根元には、そして驚いたことには枝から新芽が顔をのぞかせている。この芽がこのまま成長し、100年後にはあのような大木になるかと思えば心が躍る。また多くの青春を見続けていくのであろう。まさに「ポプラよ永遠に」である。

平成11年8月

記 生徒会



校長室に本校創立20周年記念並びに40周年記念の絵はがき（複製）が飾られています。そこにもひととき目立つ2本のポプラの大木が写されていますので、おそらく創立と同時に、あるいは創立から間もない頃に植えられたのでしょう。その後90年以上の長きに渡って本校の移り変わりを見守ってきたポプラの木は、このようにしてその姿を消すことになりましたが、このレリーフのほかにも、玄関に置かれた花瓶台と校長室の「百年の年輪」に形をとどめ、蓼高の歴史を静かに伝えてくれています。

現在も蓼科高校の正門を中心に3本のポプラが真

っ直ぐに伸び、遠くからもその雄姿を見ることが出来ます。先代が倒れた後に成長した二代目にあたる木です。ポプラは成長が早く、短い期間で先代に負けない立派な姿になりました。私たちもこの大きなポプラの木の下で、先輩たちが大切にしてきた「真っ直ぐ」な「清々しい」精神を受け継いでいきたいと思えます。天空を高く突いて立つその姿は、これからも本校の変わらぬシンボルとして、私たちを見守り続けてくれることでしょう。



校門を中心に立つ3本のポプラと校舎

## 「地域と共に知恵と勇気を育む」蓼科高校 ～地域との連携事業から～

蓼科高校では地域と連携して様々な学習活動を行っています。最近のニュースから紹介します。



当日の様子は信濃毎日新聞の全県版で紹介されました。

### 三校清掃（笠取峠松並木整備活動）

6月13日（木）、立科町内の小・中・高校生で協力して、長野県天然記念物「笠取峠の松並木」周辺の草取りを行いました。

立科町教育委員会の方から松並木についての説明をお聞きした後に作業スタートです。



### 「谷川真理ビーナスマラソンin白樺高原」にボランティア参加 6月16日（日）

白樺高原観光協会と連携した活動で、本校生徒62名職員8名がボランティア参加しました。1年生は「総合的な学習の時間」の一つとして、2・3年生は部活動単位での参加でした。親子マラソンやハーフマラソンを走る選手達に大きな声援をおくりながら、各自担当する仕事に従事しました。



ゴール地点でのドリンクサービス（右）

給水所で選手を激励（下左）



完走賞のTシャツを配布（下右）

生徒諸君の感想は…  
「疲れたけれど楽しかった！」

### 大庭遺跡

所在地：立科町大字芦田古町

縄文のムラ・古代のムラ  
立科の原点を見る



「白樺高原入口」の信号を女神湖方面に曲がるとまもなく、左手の田んぼの中に堅穴住居と高床倉庫の復元建物が見えてきます。立科町を代表する集落遺跡「大庭遺跡」です。1989年（平成元年）、県営ほ場整備事業に伴って約2,000㎡が緊急発掘調査されました。遺跡は芦田川左岸の氾濫原に展開し、縄文時代前～後期（約5,500年前～4,000年前）と古代（古墳時代末期～平安時代前半、7～9世紀）の人々の生活の跡が確認されました。古町の地域では縄文時代と古代の人々の生活域が共通しており、それが現在まで続いているわけです。こうした例は、県内に全くないわけではありませんが、珍しい例だと思われま

す。縄文時代のも<sup>たてあな</sup>として、堅穴住居跡が16軒、土坑（穴）85基、石棺墓2基、屋外埋<sup>うめがめ</sup>葬2基などが確認されています。この時期は、八ヶ岳西南麓地域を中心に「縄文王国」と称されるほどに縄文文化のピークを迎えた時代です。その華やかさに比べるとやや寂しい感じはするものの、蓼科山北麓の芦田川流域にも数棟の堅穴住居によって構成されるムラが存在していたのです。芦田川を挟んだ両岸にほぼ同じ時期の遺跡が点在していますので、一定の範囲で建て替えや移動を繰り返しながら、ムラの生活が営まれていたのでしょう。

大庭遺跡の地域で次に集落の展開が見られるのは7世紀、いわゆる飛鳥時代に入ってからです。堅穴住居跡が14軒、掘立柱建<sup>ほったてはしら</sup>物址が1棟確認されており、これらの建物が二～三段階の時期に分かれてムラを構成していたと考えられています。その他、8～9世紀段階の堅穴住居跡3軒、時期を特定できない住居跡が1軒認められますが、ここから200m北に位置する中居遺跡群とされる地区からは大量の遺物が採集されているということです。奈良・平安時代の集落跡が埋蔵されている可能性が高いと考えられています。大庭遺跡の住居跡は、その外れに位置していたものかもしれません。佐久市から御代田町にかけて、9世紀前後に位置づけられる大規模な集落遺跡がいくつも展開していますので、古東山道が通っていた立科の地域にもそうした集落があっても不思議ではありません。今後の調査に期待されるところです。



大庭遺跡の調査跡地はそのまま埋め戻され史跡公園として整備されています。出土遺物は町で保管され、一部が中央公民館に展示されています。また中居遺跡群出土の遺物は立科小学校に所蔵されています。

※遺構の数及び名称は、『立科町誌』の記述に拠りました。

3間×5間の掘立柱建物を復元したもの。貯蔵庫としての高床倉庫と考えられている。